

研究主題

# 21.5世紀を拓く

～学びに向かう力を育む黒門流の授業づくり～





## 挨拶

台東区教育委員会教育長 矢下 薫

今年度全面実施となった新学習指導要領では、「2030年の社会」の在り方を見据え、子供たちの学びをいかに支えるかが強く意識されました。加速度的に変化し続ける予測困難な時代において、子供たちが社会に主体的に向き合い、よりよく関わっていくためには、学校教育を通じて育むべき「資質・能力」を明確化するとともに、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を推進することが不可欠です。

台東区教育委員会におきましては、令和元年10月に改訂した「台東区学校教育ビジョン」の施策目標の第1に「新しい時代に対応する資質・能力を育成する」ことを掲げております。子供たちが自分の人生を切り拓いていくための力を身に付けることが重要であると捉え、各学校園において、これからの社会を生き抜く力を育成するための教育・保育の充実を図っております。

そのような折、台東区立黒門小学校では、令和元・2年度台東区教育委員会研究協力学校として、研究主題を「21.5世紀を拓く～資質・能力を育む黒門流の授業づくり～」と設定し、予測困難な時代を生き抜く子供たちにとって必要な資質・能力を明確にした上で、授業実践・授業改善を進めてこられました。

各学校園におかれましては、本校における取組や研究・実践発表の内容を教育活動に取り入れることで、子供たちの「生き抜く力」をより一層育成していただけるものと確信しております。

結びにあたり、本校の研究を推進するにあたり、丁寧な御指導・御助言を賜りました講師の先生方に心から感謝申し上げます。また、本校の研究に熱心に取り組んでこられました、石田 隆校長先生、そして教職員の皆様方の御努力に対しまして、深く敬意を表します。



## 未知の世界を切り拓く

台東区立黒門小学校長 石田 隆

新型コロナウイルス感染拡大により、全世界が混迷を極めています。学校は新年度を臨時休業で迎えるという、かつてない経験をしました。私達は、学校再開に至る過程から、感染症対策を徹底しながら、子供たちの学習を保障していくということの両立について考えるとともに、「学校教育ならではの学び」や、「学校教育が果たすべき役割」について、改めて考えさせられました。

黒門小学校では、激しい変化が予想される未来社会を2050年(21.5世紀)と具体的に位置付け、子供が新たな知を拓くために必要な資質・能力を育成する「21.5世紀を拓く」黒門教育の推進に努めて参りました。「よい授業の追究」「アクティブ・ラーニングの視点を生かした授業づくり」「深い学びの追究」という授業を核としたこれまでの研究の積み重ねを生かし、令和元年度からは、研究副主題を「学びに向かう力を育む黒門流の授業づくり」として、主に日々の学習の中で「学びに向かう力を育む10の手だて」を講じた授業を実践し、その有効性を検証して参りました。

今回のコロナ禍の社会状況を鑑みた時、未知の体験に対しても、冷静に自分を見つめ、多様な他者とも協働しながら、一人の主体としてやるべきことを行い、次の一步を踏み出すという力の重要性を痛感しました。そして、本校の研究は、まさに今後ますます求められるだろう、こうした自律した能動的な学習者を育てていくことに深く関わる内容であるということを実感するに至りました。

今回、令和元・2年度台東区教育委員会研究協力学校の指定を受け研究を進めることで、黒門教育の一層の充実につながることができました。残念ながら、研究発表会は感染拡大防止の観点から開催できず、研究内容は、本リーフレットでの紙上発表とさせていただきます。台東区の教育や子供たちの学びに対する新たな視点となれば幸いです。また、御意見等賜ることができましたら幸いです。

このような貴重な機会を与えてくださいました台東区教育委員会をはじめ、8年間継続して、年間講師として御指導いただいている白百合女子大学 教授 中田正弘先生に衷心よりお礼申し上げます。

# 研究のグランドデザイン

<2050年未来予測>

- ◎科学技術が進歩し、誰もがビッグデータを活用したり、高度な医療を受けられ寿命が延ばせたりする一方で、AIの進歩により、現在ある仕事がAIに取って代わられ、人間はよりよく生きるために新たな価値を創造しなければならない社会。
- ◎グローバル化が進み、これまでにない価値観や考え方の多様性が生まれ、多文化・多人種と共存・共生することが求められる社会。

## 2050年に社会の中心として活躍する人間とは



- 自ら考え、主体的に行動して、責任をもって社会変革を実現していく人間
- AIにはない、創造性や共感力をもつ人間
- AIを設計、開発、活用する力をもつ人間
- 個性や多様性を受け入れることができる人間
- 自ら課題を見つけ、それを解決するために行動できる人間
- 自分の考えや個性をもち、それを発信できる人間

## 21.5世紀をよりよく生きるために、今育てるべきもの

### コミュニケーション能力

- 語学力 表現力
- 多様な考えを受け入れる力
- 相手の気持ちを想像する力
- 協調性 交渉する力

### 社会の変化に対応する力

- 論理的思考力、判断力
- 見通しをもつ力 粘り強くやりぬく力
- 多角的な視点 課題を発見する力
- プログラミング力

### 新しい価値を生み出す力

- 発想力 創造力 感性

## 教科等で育成すべき三つの資質・能力

知識及び技能

思考力、判断力、表現力等

学びに向かう力、人間性等

## 学習



## 現在の子供たち

<研究仮説>

目指す児童像を明確にし、その視点に立って、学習の流れや評価を工夫することで、「学びに向かう力」が育まれるだろう。また、このような学習が繰り返されることで、21.5世紀をよりよく生きるために必要な力が身に付くだろう。

視点①「学びに向かう力」がある  
児童の姿の明確化

視点②「学びに向かう力」を向上  
させるための学習の流れ

視点③「学びに向かう力」を持続  
させるための振り返り

<黒門流の「学びに向かう力」>

◎多様に変化する社会の中で、生涯にわたって主体的に学び続けることができる力

- 課題や目標に向かって自らの意志で学び続ける力 (ア)
- 学びの環境をつくる力 (イ)
- 自己の成長を実感し、成功体験を積み重ねる力 (ウ)
- 自律的な学習動機付け (エ)

<黒門流の「学びに向かう力」がある児童像>

- 問題や課題に興味、関心をもち、主体的に取り組む子 (ア) (エ)
- 学ぶことに価値を見だし、粘り強く取り組む子 (ア) (エ)
- 友達や先生との関わりの中で、他者の考えを認め、それを生かせる子 (イ)
- 自分の学びを振り返り、できたこと、分かったことの喜びを自信につなげられる子 (ウ)

目指す児童像

高学年

- 目標の達成に向けて、他者と協働しながら、主体的に取り組む子
- 自己の成長や学びを客観的に振り返り、それを生かして自らの意思で学び続ける子

中学年

- 課題の解決に向け、見通しをもって粘り強く取り組む子
- 様々な方法で問題や課題に取り組むことで、自分の考えを深める子

低学年

- 課題に意欲的に取り組み、できたことや分かったことを自信につなげられる子
- 自分の考えを伝えたり、友達によさに気付いたり、これまでの経験を生かしたりして学ぶ子

## 学びに向かう力を育む「黒門流の授業づくり」10の手だて

「**学びに向かう力**」は、他の資質・能力をどのような方向性で働かせていくかを決定付けるものとされており、学ぶことの根底にある大切な力と捉えることができる。

子供たちが変化し続ける社会に適応するために、生涯にわたって主体的に学び続けるための意欲や多様性を尊重し、他者と協働して学ぶ姿勢である「**学びに向かう力**」を育むことが、21.5世紀をよりよく生きる際に必要な力を身に付けることにつながると考えた。

これまでの研究の蓄積から、本校で大切にしてきた「授業づくり」の要素を精選し、**学びに向かう力を育む「黒門流の授業づくり」10の手だて**としてまとめ、有効性を追究するとともに、その汎化に努めている。

スタート



ゴール

単元 **つかむ・出合う** → **かかわる・調べる** → **深める・広げる** → **まとめる・振り返る** → **生かす・つなげる**

### 1 明確な学習ゴール

児童一人一人の学習意欲を喚起するような学習ゴールの設定を目指す。また、課題解決に至るまでの難易度を上げることで、「学びに向かう力」を持続させるようにする。

### 2 インパクトのある導入

1単位時間、または単元での導入を工夫することで、児童を学びに引き込むことができる。児童が既存知を活用しても解けない課題や疑問をもつような課題に向き合うことで、課題の解決に向けて進んで取り組むようにする。 ※既存知…「既知」と「経験」を合わせて「既存知」とした

### 3 ねらいの焦点化

授業のねらいをしぼることで、児童のめあてや、何をどのように学ぶかが明確になることで、児童も安心して学習に取り組むことができる。児童の活動を価値付ける指針としても有効である。また、めあてを自己決定するなど個に応じためあてを設定することも「学びに向かう力」を高めることにつながる。

### 4 揺さぶりのある問い

指導者の発問によって、児童の学習を方向付けることができ、学習を進めていく中で常にねらいに立ち戻らせることができる。明確なめあての下、学ばせたい内容により近付くことができるような発問や対話的に学び合っ互いの考えが深まるような発問を工夫していくことが大切である。また、学習の途中で指導者があらかじめ想定していた問いを意図的に提示し、さらに考えさせたり、自分の考えを再構築させたりすることは、常に新しい視点を与え、「学びに向かう力」を持続させることにつながる。

### 5 必要感のある学び合い

個人で課題解決に取り組む時間を保障することはもちろん、少人数グループでの話し合いや他のグループとの情報交換、学級全体で自由に話し合う時間を保障することは、児童相互の考えを再構築させるためにも大切である。しかし、設定すれば学びにつながるとは言えない。児童が自力解決で困ったり他者の考えと比較して考えたい時など、対話を必要と感じた時こそ有効となる。学習形態や交流のさせ方、タイミングを工夫することで児童主体の学習につなげることができる。

### 6 自己有用感を高める価値付け

児童が頑張っていること、できていること、よい考えや取組などを称賛したり、励ましたりしていくことで自己肯定感を高めることができる。また、児童の気付きや考えなどを学級全体で紹介するなど学習の価値付けを行うことで、取り上げられた児童の自己有用感を高めたり、他の児童の「学びに向かう力」を高めることにつながりすることができる。

### 7 自己を見つめる振り返り

自己の学びや成長を振り返ることは、粘り強く学習するためにも、自らの学習を調整するためにも必要不可欠な活動であり、自己のメタ認知能力を育むことにつながる。また、指導者が意図した振り返りを全体共有することで、児童の視点を広げたり、次の学習のめあてにつなげたりすることができる。この繰り返しは、児童の振り返る力や自己肯定感、自己有用感を高めることはもちろん、「学びに向かう力」を高めることができる。

### 8 実感を伴う学習

児童が自らの諸感覚を最大限に働かせて、具体的な体験を通して得られる理解を大切にしながら学習過程を組むようにする。児童の「やってみたい」「確かめたい」という動機が学びの原動力となり、児童の主体的な学びの実現につながる。また、学習過程を活動先行型や達成型にしたり、段階的に組んだり工夫することで、児童の「できた」「分かった」という実感をより引き出すようにしていく。

### 9 実態をふまえた教材の工夫

どんなに魅力ある教材でも児童の実態に合っていないければ、学習内容の獲得に大きな差が出てくるため、児童理解が教材を工夫する上で重要となる。そのため、児童の実態を事前に調査するなどし、実態に沿って教材を工夫することで、学びに引き込むことができる。

### 10 学びを広げる環境

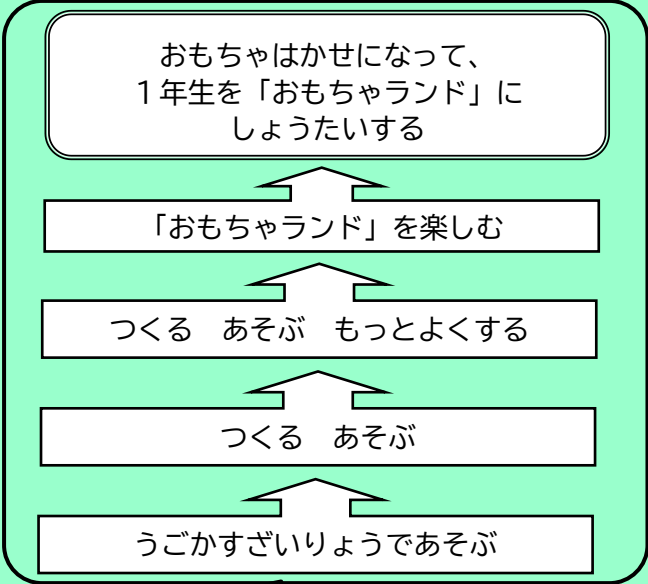
学習環境を整備したり、学習の時間を工夫したりすることは、児童の活動時間を十分に保障したり、児童同士の交流を活発にさせたりするなど、児童の学びを広げることにつながる。学習過程を可視化し、見通しをもたせたり、困ったときの支援につなげたりするなど視覚的な資料を効果的に活用していく。また、情報や材料などを精選し、どのように児童に与えるかなど、意図した環境づくりを行うことで、安心して学べる環境をつくることができる。

# 低学年分科会

## 1. 研究授業での実践授業

○第2学年 生活 「めざせ おもちゃはかせ」

<「学びに向かう力」を育む黒門流の単元構想>



本単元では、「おもちゃはかせになって、1年生をおもちゃランドにしようたいしよう」という学習ゴールを設定し、学習を進めた。まず、動力となる、ゴムやおもり、風などはたらきやおもしろさに気付くよう、素材遊びを行う（うごかすざいりょうであそぼう）。次に教師の紹介する、動力を使った簡単なおもちゃをつくってたくさん遊ばせることで、主体的な学びを引き出していく（つくろうあそぼう）。その後、友達との学び合いや動くおもちゃを作る活動を通して、みんなで楽しく遊ぶ「おもちゃランド」へと展開した。

このように明確な学習ゴールと小単元の設定によるねらいの焦点化を行うことにより、児童が見通しをもって学習を行うことができ、学びに向かう力を高めることができた。

また、学びを広げる環境の設定により、おもちゃづくりの場が広がるだけでなく、自然と友達との必要感のある学び合いが生まれ、児童の思考を広げることができた。



<手だて>

- 1 明確な学習のゴール
- 3 ねらいの焦点化

昨年度、2年生（現3年生）から「おもちゃランド」に招待された経験から、「自分たちもおもちゃを作り、1年生を招待したい」という願いをもって。この児童の願いを基に単元目標を設定することで学習のゴールが明確になると考えた。

実際の学習では、学習を進める中で児童とともに小目標を設定しながら、単元の目標に向かわせる。（「小単元の設定→活動」を繰り返す）明確な学習のゴールと小単元の設定によるねらいの焦点化を行うことにより、児童が意欲と見通しをもって学習に取り組むことができたようにした。

- 5 必要感のある学び合い

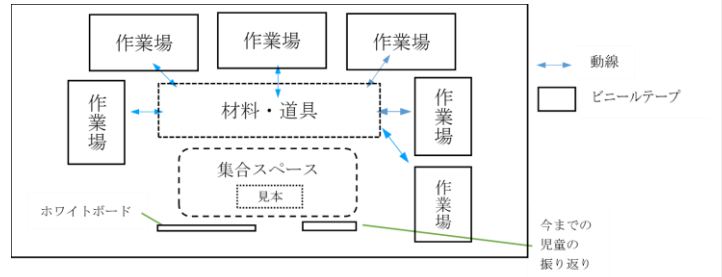
活動を通して自分や友達との関わりを意識し始める低学年の時期は、学び合いの基礎を学ぶ段階であると考えた。

そこで、単元を通して、教師が学び合いを促す場面を設定し、教師がナビゲート役となり、話し合いの仕方や情報交換の有効性を指導した。教師が児童同士をつなげたり、対話を価値付けたりすることで、児童の学び合う力を向上させていく。

- 10 学びを広げる環境

太陽広場(体育館と同規模)を活用することで、空間を生かした遊びが展開でき、児童がのびのびとおもちゃづくりに取り組むことができると考えた。

また、少人数グループでの作業場を設定することで、友達との意見交換が、「おもちゃのよさへの気付き」や「工夫・改善点の発見」につながるようにした。



## 2. 低学年分科会 他クラスの実践について

○第1学年 算数「どちらがおおい」

手だて： 8 実感を伴う学習

一見ただけではどちらが多く入るのか判断できない2つの容器を用意することで児童の興味関心を高めた。児童は、実際に水や容器を操作して、友達と試行錯誤しながら水のかさの比べ方を考えた。実物を操作することにより、児童の主体的な学びにつながり、体験的に学習の理解を深めることができた。

○第2学年 図画工作「ふくふくフクロウ」 手だて： 2 インパクトのある導入

紙をくしゃくしゃにして袋にする活動を行い、素材と十分に触れ合う時間を設定した。袋が福を呼ぶフクロウに変わることを伝えると「わあ〜!」という歓声が上がり、進んで学習に取り組むことができた。学習活動へのよい動機付けとなった。

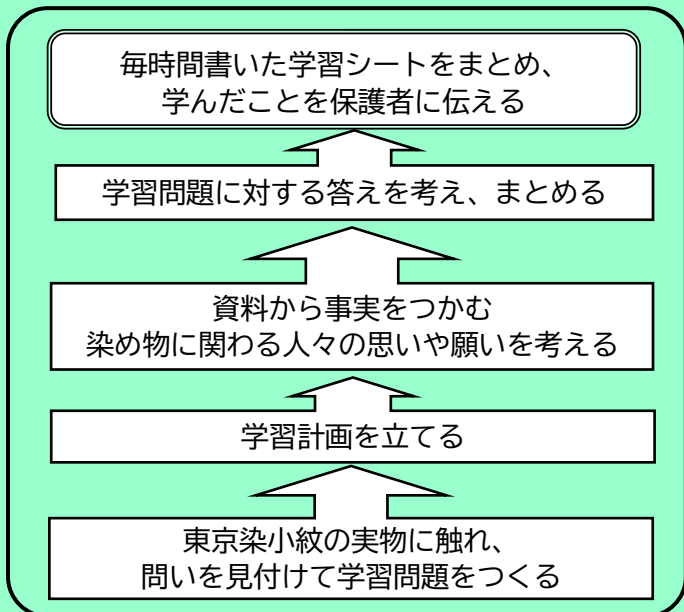


# 中学年分科会

## 1. 研究授業での実践授業

### ○第4学年 社会 「染め物のさかんな新宿区」

<「学びに向かう力」を育む黒門流の単元構想>



単元の始めに、遠くからは無地に見える江戸小紋の着物や端切れを提示し、実物に触れさせた。また調べる過程では、実際に教師が染め物体験をした映像や職人のインタビュー資料など、実感を伴うことができるような資料を随時提示しながら学習を展開した。細やかな柄を間近で触れたり実際の作業を見たりすることで、手作業で染めるための高い技術が必要であることに気付かせ、染め物作りへの興味・関心を高めたり持続したりしていきけると考えた。

この単元構想に基づいて学習を展開していくことで、導入時に児童の学習への意欲を喚起し、主体的に学習問題をつくりあげることができた。また、学習のねらいを明確にし、実感を伴うことができる資料を随時提示していくことで、導入で高まった学びに向かう力を持続させ、自ら進んで課題解決に向かうことができた。



<手だて>

### 2 インパクトのある導入

第1時で小紋柄の着物を教師が実際に着用し、児童に見せた。こうすることで、自分たちの生活と伝統的な産業が今も結び付いていることを実感できると考えた。

また、その着物の布がどこで作られているか予想させる際に、「昔から伝統的に作られていること」「細かい柄で染められていること」等を考える視点として与え、社会的事象の見方・考え方を働かせられるようにした。こうすることで、児童の驚きや発見が生まれ、学習への意欲向上につながると考えた。

### 3 ねらいの焦点化

学習問題の設定後、毎時間「①本時の問いについて資料を調べる《調べる》②染め物に関わる人々の思いや願いを考える《考える》」という学習活動を行った。同じ学習の流れを繰り返すことで、児童が学習の見通しをもち、学習問題の解決に向けて主体的に思考し、考えを深めていくことができると考えた。

また、学習シートに「本時の問い」「資料から分かったこと」「まとめ」「職人の思いや願い」を書く枠やふきだしを入れておき、教師がそこに視点を向けるよう声掛けをすることで、調べることを明確にし、染め物に関わる人々の思いや願いに確実に触れられるようにした。

### 8 実感を伴う学習

染め物をはじめとする伝統的な産業は、児童にとってなじみの薄いものである。そこで導入時に、着物や端切れに実際に触れさせる活動を取り入れた。また、作り方を調べる際には、細かく彫られた伊勢型紙を提示したり、教師が実際に工房へ行って撮影してきた染め物体験やインタビューの映像を見せたりした。実物や実際の映像などの資料を随時提示することで、その技術の高さや細やかさと、職人の工夫や努力を実感できると考えた。

このような実感を伴う学習を展開することで、染め物への興味・関心は高まり、「知りたい」「調べてみたい」という主体的な学習への意欲を継続させるとともに、染め物産業に関わる人々の思いや願いに触れられると考えた。

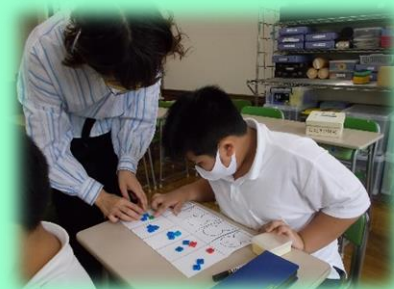
## 2. 中学年分科会 他クラスの実践について

### ○第3学年 総合「黒門小はかせになろう」 手だて： 1 明確な学習ゴール

「黒門小はかせになり、全校児童へ向けてクイズを出そう」という学習ゴールを設定することで、そこへ向かって見通しをもって取り組めた。黒門小という自分たちにとって身近な場所を題材にすることで、児童の学習意欲の喚起にもつながり、探究的な活動を積み重ねていくことができた。

### ○第3学年 算数「あまりのあるわり算」 手だて： 9 実態をふまえた教材の工夫

児童の実態に応じて、具体物を操作したり実際に体験したりする活動を積極的に取り入れた。板書や紙面上ではなかなか理解が難しい児童も、具体物を手元で操作することが解決の糸口になり、実感を伴った理解につなげることができた。

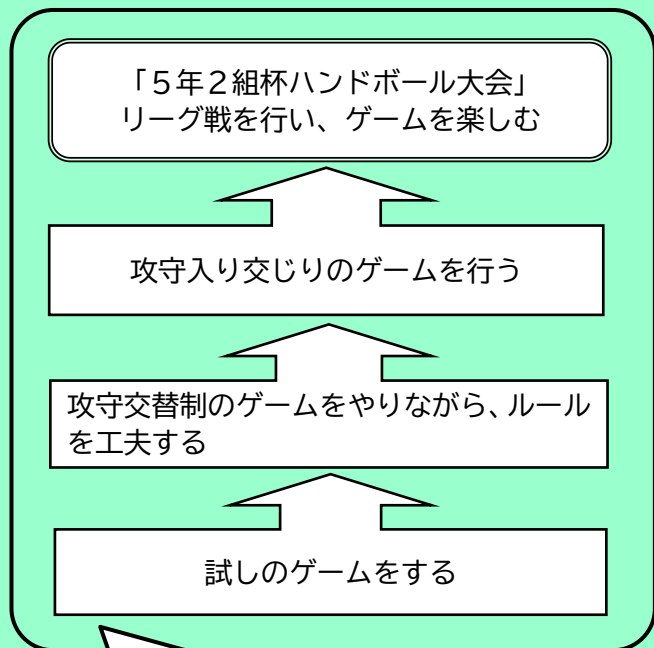


# 高学年分科会

## 1. 研究授業での実践授業

○第5学年 体育 「ハンドボール」

<学びに向かう力>を育む黒門流の単元構想>



学習の流れは、まず、攻守交替制の試しのゲームから始め、ルールを工夫しながらゲームを楽しむようにする。次に、チームの特徴を知り、チームに合った作戦とはどのようなものか考えていく。そして、チームの特徴を生かした作戦を考え、リーグ戦を実施した。「リーグ戦を行い、ゲームを楽しむこと」を学習ゴールに設定することで児童は意欲的に練習に取り組んだり、作戦を考えたりすると考えた。

このようにスモールステップで段階的にゲームの様相を変化させ、毎時間のねらいを焦点化することにより、児童が安心して学習に取り組め、学びに向かう力を高めることができた。また、明確なめあてが設定されていることで、教師も児童の学習を方向付ける発問や声掛けを意図的に行うことができ、児童の思考を深めることができた。



<手だて>

3 ねらいの焦点化、4 揺さぶりのある問い

単元全体を見通して、毎時間のねらいをしぼることで、児童が自己のめあてを立てやすくした。めあてが明確になれば、児童の学習を方向付けることができ、学習を進めていく中でめあてに立ち戻ることができると考えた。これは、児童の活動を価値付ける際の指針にもなり、質の高い学びが期待できる。また、学習の途中で教師があらかじめ想定していた問いを意図的に投げかけることで、さらに考えさせたり、自分やチームの考えを再構築させたりすることができるようにした。

6 自己有用感を高める価値付け

児童が主体的に学習に取り組んでいる時やよい動きやプレイがあった時、考えや取組のよさを見つけた時などに進んで称賛したり、励ましたりすることで自己有用感を高められるようにした。また、学習の中で児童のよい動きやプレイ、考えや取組のよさを取り上げて全体に紹介するようになった。初めての「ゴール型」ボール運動であるので、特に主体的に学習に取り組む態度に重点を置いて価値付けていくとともに、個人内評価で見取った児童のよかった点についても進んで価値付けし、学級で共有し、互いのよさを認め合える雰囲気を醸成していくようにした。

7 自己を見つめる振り返り

個人の学習カードとは別にチームカードを作成した。チームカードは、試合の前に作戦や動きを確認できるものにする。振り返り時には、チームの課題や作戦が有効であったかななどを話し合い、自己のチーム内での役割についてメタ認知できるようにして、客観的に自己の学びを振り返ることができるようにした。

さらに、教師は児童が行った振り返りに対してアドバイスや称賛を行い、自己の学びを調整できるように支援していくとともに、よい振り返りや価値付けたいことを全体に広めることで学びに向かう力を高めていくようにした。

## 2. 高学年分科会 他クラスの実践について

○第6学年 理科 「水溶液の性質」 手だて： 2 インパクトのある導入

教科書に掲載されている水溶液ではなく、児童の身近にある水溶液を使用し実験を行うようにした。身近な水溶液を用いることで、児童は興味関心を示し、今までの生活における既存の知を生かしながら、課題の解決に向けて意欲的に取り組むことができた。

○第5学年 体育 「走り高跳び」 手だて： 9 実態を踏まえた教材の工夫

単元の学習を始める前に児童にアンケートを取り、実態を踏まえた上で単元構成や教材を工夫した。アンケートの結果から「友達との教え合い」「友達と競争」「友達と協力」といったことに楽しさを感じている児童が多いことから、個人で行うのではなくグループを作成し、目安の記録との差を数値化し競い合う、チーム対抗戦で行った。そうすることで児童は必要感をもって学び合い、競い合う楽しさや喜びを味わうことができた。



# 研究の成果と課題

## <成果>

- ◇学びに向かう力を育む10の手だてには、それぞれの関連性があり、それらを意識して意図的に授業づくりをすることで、児童の学びに向かう力を育むことに大きな成果をあげることができた。
- ◇ねらいや問いをしぼることは児童が学習内容を理解するだけでなく、自らの学習を調整することに効果的であった。また、児童への価値付けや支援の具体化を図ることにつながり、教師の役割が明確化した。
- ◇導入を工夫したり、魅力ある教材を提示したりすることで児童を学びに引き込むことや児童が学習のねらいを理解して取り組める授業づくりをしていくことが学習意欲の持続につながった。
- ◇友達からの認め合いや教師からの価値付けを普段の学校生活における役割などと結び付け、より具体的にすることで、自己有用感のさらなる高まりにつなげることができた。

## <課題>

- ◆発達段階を考慮した手だての工夫と指導の積み重ね方
- ◆教科の特性に応じた手だての講じ方
- ◆学びに向かう児童の姿の見取り方

# 御指導いただいた講師の先生

白百合女子大学 人間総合学部 初等教育学科 教授 中田 正弘 先生

# 研究に携わった教職員

校長 石田 隆  
副校長 栖原 太郎  
1年 高橋 明子 ○飯田 泰  
2年 ○濱 宗伸 園田 雅子  
3年 篠塚 万奈 ○平山 陽介  
4年 ○深町奈緒子 飛澤久並子  
5年 ◎松本 大将 山岸 正太  
6年 ○谷内 良隆 板井 信孝  
音楽 打田未来歩  
図画工作 ○發知 美黄  
算数少人数 ○鳳子 孝枝  
養護 梶山 弥恵  
学校事務 小板橋淳子  
栄養士 飯田 里子

きこえとことば 藤村 洋子 金子 清輝  
菊池 理恵 霞 邦子  
福井 珠希 武藤 昌子  
榎並健之介  
さくら教室 田原 千絵 田中 成美  
森谷みどり  
講師 小栗 歩 前田 智子  
白鳥 あみ  
特別支援教室専門員 新谷 寧子  
支援員 鈴木 祥子 大塚みどり  
高田奈津未  
スクールカウンセラー 佐藤 葵 橋立 藍子  
産育休 工藤 彩子

## ◆令和元年度

千木良康志 初谷 京子 藤澤 翔

◎研究推進委員長 ○研究推進委員